

鷗外の文語文体翻訳内における「係り結び」と そのドイツ語原文との対応

～係助詞ヤについて～

高橋 純
(総合文化学科)

*Kakari-musubi in Ogai's Translations in Classical Japanese Style and Its
Correspondence with German Originals: On Kakari-Particle ya.*

Jun TAKAHASHI

キーワード：森鷗外，文語文，翻訳，係り結び，係助詞ヤ
Ogai Mori, classical Japanese Style, Translation, *kakari-musubi*, *kakari-particle ya*

0. はじめに

森鷗外の文語文体における疑問表現の研究として、藤田 (2011, 2012) が、係助詞¹⁾ ヤ・カ・ゾの分析を行っている。藤田 (2011, 2012) では、疑問を意味する係助詞ヤとカについて、文中にあるときと、文末にあるときで意味が違っていることを指摘している。

そこで、本稿では、このような意味の違いがあるのならば、鷗外が翻訳した作品を用いて、ドイツ語の原文はどのようになっており、係助詞の用いられ方と関係があるのかを観察することとした。それによって、鷗外の係助詞の使い方をより明確に分析できると考えた。

しかし、本稿では、紙幅の関係により、また多くの例文の分析を試みるという意図から、係助詞ヤのみを扱うこととし、使用する作品も、「地震」と「悪因縁」²⁾ という Heinrich von Kleist (1777-1811)³⁾ の翻訳2作品を扱うこととした。この両作品は、明

治23 (1890) 年に著されたもので、鷗外の作品としては、初期のものに分類される。

1. 藤田 (2011, 2012) について

ここでまず、先行研究としての藤田 (2011, 2012) を概観し、その疑問点を提示し、ドイツ語原文と比較する意義を説明する。

藤田 (2011, 2012) では、ヤやカが文末助詞として使用されている(1a)の場合 (文末助詞疑問文) と、文中で用いられ、「係り結び」として用いられている(1b)の場合 (係結疑問文) で、疑問文がどのように違うかを分析している。

- (1) a. 花、咲くや。
- b. 花や咲く。

(藤田2012)

そして、この違いを以下のようにまとめている(藤

田2012:30) 4) :

- ①文末助詞疑問文と係結疑問文とでは、前者が疑問問う表現としてもっぱら用いられるのに対し、後者は「～ジャナイカ／～ダロウ」といった推量・想像を言うのに用いられるというような使い分けがある。
- ②「～にや」で言い切られる文は、「～(ナ)ノカ」といった意で、問に用いられる。
- ③文末助詞疑問文の文末助詞としては、「や」も「か」も用いられるが、前者の場合積極的な対他性が際立つのに対し、後者はそうした対他性が必ずしも際立たない「中立的な性格」のものと解される。

しかし、反例となる(2)をあげ、「徹底した規則性
とまでは言えるものではないようである」としている。

(2)いひかはしたる人やあると問ひぬ。(悪：487)⁵⁾

では、実際、このような形式は、ドイツ語の原文ではどのようなものなのであろうか。そこで、ドイツ語原文と比較しながら鷗外の訳を、さらに詳しく検証しようと考えている。

では、なぜドイツ語との対比が必要なのだろうか。鷗外の訳した日本語のみで意味を捉えようとする
と、それは、同一文章内の文脈による推定ということになり、鷗外がどのような意図で(事態に対して)その形式を使用したのかが明確にはならない。そこで、ドイツ語という鷗外にその言語形式を使おうと思わせた元の形式を可視的に確認することで、鷗外の翻訳に使用した形式の意味を客観的に把握することができると思われるからである。

本稿では、藤田(2012)の上記に引用した①と②を、係助詞やに絞って、ドイツ語の原文と比較し、鷗外の翻訳意図を探っていく。

藤田(2011, 2012)は、疑問文を考察するという
ことで、係助詞やとカの違いよりも、その助詞の文内における位置に重きを置き、その意味の違いを分析した。その意味で、まずやに絞って、文中に現れる際と文末に現れる場合を比較することは、一応の

措置とはいえ、意味があることと思われる。

ちなみに、ドイツ語の原文は、鷗外が実際に用いたものを使用するが、解釈の参考として、現在 Reclamから出版されているKleistの作品集も援用した。

2. 係り結びのヤについて

係り結びとしての係助詞ヤが使用されているドイツ語における箇所をまとめると、以下の点に絞られる。

- I. 構造上分割した場合
- II. nicht (否定辞)の位置が移動している場合
- III. 強調の副詞が使用されている場合
- IV. 原文にない補足として

2.1 構造上分割した場合

ここでは、ドイツ語においては一続きの文で構成されているものが、構造上日本語では、分けざるを得なく、その部分を別に取り上げている際に、係り結びで囲んで用いているという例である。

例としては、zu不定詞句や関係代名詞句の部分
を独立させた場合、そこにヤが挿入されている例である。以下の例文^{6) 7) 8)}には該当箇所を、連続して指定できる場合は、[] 括弧で囲み、分離して指定せざるを得ない場合は下線で示した。以後の例文は、すべてこの方法に準じることとする。

(3-J) 父も此變に遭ひて心釋けたらましかば、[君をゆるさでやはあらむ]。(地：464)

(3-D) daß auch sie nicht mehr, falls ihr Vater nur noch am Leben sei, [ihn zu versöhnen] zweifle

(4-J) われは「ドン」フェルナンド、オルメスなり。[汝たちも皆知りてやあらむ]。市の令の子なるを。(地：467)

(4-D) ich bin Don Fernando Ormez, Sohn des Commandanten der Stadt, [den ihr alle kennt].

(5-J) かしこにて白人のみなごろしにせられしことは、[おん身も知りてやあらむ]。(悪：479)

(5-D) Ich komme von Fort Dauphin, wo, [wie Ihr wißt], alle Weißen ermordet worden sind

(6-J) [往方をや知りたる]と問へど(悪：489)

(6-D) daß sie nicht wisse, [wo ich sei],

(3)は、間接話法で語られているので、ihn (彼を) となっているが、「君をゆるす」とzu不定詞句と対応している。(4)は、ドイツ語原文では、関係代名詞節で「Sohn (息子)」に係っているが、「おん身も知りてや」と、日本語としては、本来の文から分離して別に取り上げている。また、(5)はドイツ語では挿入句として文内に内包されているが、日本語ではその部分が語順を変えて「汝たちも皆知りてやあらむ」と現れている例である。(6)は、「往方」と名詞になっているが、ドイツ語では、「wo ich sei」と副文であり、その部分をヤで承けているのである。

次の例も、ドイツ語内では同一文もしくは同一節内にあったものを別に取り上げたものであるが、上記の(2)～(5)と若干違うのは、ヤで承けている句と連体形の結びで挟まれている部分に相当するドイツ語は、接続法Ⅱで実際には起こっていない事態を表現している。つまり、意図は先の例と同じだが、文として機能が違う接続法Ⅱの節をヤで承けている句と連体形の結びで挟んでいるのである。

(7-J) 彼のおそろしき天災は忽ち人心を激動して、
[夙怨を釋きもやしけむ]。(地：462)

(7-D) Es war, als ob die Gemüther, seit dem fürchterlichen Schlage, der sie durchdröhnt hatte, alle versöhnt wären.

(8-J) ここにこそと叫びし三たりめの男は、あな優しの信徒の心や、ジョセフエが髻を握みて引き倒さむとしつ。フェルナンドが支へとどめむとせざりせば、[フェルナンドが子を抱きたるままにて地に倒れもやしけむ]。(地：467)

(8-D) hier! versetzte ein Dritter, und zog, heiliger Ruchlosigkeit voll, Josephen bei den Haaren nieder, [daß sie mit Don Fernandos Sohne zu Boden getaumelt wäre], wenn dieser sie nicht gehalten hätte.

(9-J) 忽又打笑みて客の面を仰見て、[湯のさめもやせむ] といふ。(悪：488)

(9-D) wandte sie sich mit einigem Ausdruck von

Heiterkeit wieder zu dem Fremden zurück und erinnerte ihn, daß sich das Wasser, wenn er nicht bald Gebrauch davon machte, abkälten würde.

確かに、(3)～(6)と(7)～(9)の例の間には、直接法と間接法の違いが見られるが、基本的には、そのドイツ語の定動詞によって一つにまとめられている節と呼応している場所に、ヤの係り結びが用いられていることが観察される。

では、(2)はどうなっているだろうか。(10)として再び取り上げる。

(10-J) [いひかはしたる人やある] と問ひぬ。(= (2))

(10-D) und fragte sie, [ob sie schon einem Bräutigam verlobt wäre.]

この例 (10-J) では、ドイツ語 (10-D) の「彼女は既に婚約者と婚約しているのではないか」という文が、「人」にかかる修飾句として現れている。つまり、(10)もドイツ語の文の構造を分割して翻訳した部分に相当する。ただし、ドイツ語の定動詞部分が日本語では連体形として現れたため、それを承ける名詞にヤが用いられたのだろう。

2.2 nicht (否定辞) の位置が移動している場合

この節で取り上げている例は、同一文もしくは節内から別に取り上げている例ではないが、nicht という否定辞が文全体を否定する位置以外に置かれ、特定の語に係っている際に、その語にヤが付加されている例である。

(11-J) 抱きしフィリップにつぎて [かはゆき人もや来る] と見かへれど見えず。(地：460)

(11-D) ob nicht Einer, der ihr nach dem kleinen Philipp der liebste auf der Welt war, noch erscheinen würde.

(12-J) [おのれを知れる人やある] とあたりを見廻しぬ。(地：468)

(12-D) bald überflog er die Versammlung, ob nicht Einer sei, der ihn kenne?

(13-J) ストリヨオムリイ父子は少女が屍をいかにせむかと思ひまどひて、[母をや呼ぶべき]といふ程に、(悪：510)

(13-D) während Herr Strömli und seine Söhne unter stillen Thränen berathschlagten, was mit der Leiche anzufangen sei, und ob man nicht die Mutter herbeirufen solle,

これらの例は、ヤでもってそのドイツ語で否定している範囲を示しているのであろうか。これと似た例は、次の副詞の例にも見られる。

2.3 副詞が使用されている場合

この例は、副詞でもってその語に意味を付加している箇所をヤで承けている例である。

(14-J) かくてありしは [十五分ばかりにやありけむ]。我にかへりて、なかば身を起しつ、(地：457)

(14-D) Er mochte wohl eine Viertelstunde in der tiefsten Bewußtlosigkeit gelegen haben, als er endlich wieder erwachte

(15-J) [かくても飽足らずやありけむ]、老たるバベカンと十五歳なる娘トオニイとに復讐の擧を助けしめむとせり。(悪：476)

(15-D) Ja, er forderte, in seiner unmenschlichen Rachsucht sogar die alte Babekan mit ihrer Tochter, einer jungen fünfzehnjährigen Mestize, Namens Toni, auf, an diesem grimmigen Kriege, bei dem er sich ganz verjüngte, Antheil zu nehmen;

(14-D)の「wohl」という副詞は、「平叙文に用いられ、陳述内容がおそらく事実であろうという、話し手の推測の気持ちを反映して」⁹⁾いる意味である。つまり、気を失っていたので、15分という長さは推測ということを表している。(15-D)の「ja」は、「先行する発話を受け、その内容をさらに一段と強調して」使用するものである。つまり、(15-J)の「かくても飽足らずやありけむ」は、「ja」一語の訳と言うことになる。もしくは、「sogar (それどころか、

～でさえ)」という部分も含めているのかも知れない。ちなみに、もし「ja」を「かくても飽足らずやありけむ」と補足しながら訳したとすると、次の節2.4に説明する使用にも通じる。

2.4 原文にはない補足として

ここでは、ドイツ語にはないが、翻訳時に補足した部分にヤを付している例である。

(16-J) 出でにし後も [猶情にひかれて逢はむとすることもやあらむ] と、父はいたく娘を戒めし、その甲斐なく、隙を偷みて相見むとせしを、断えず心を配り居たりし驕慢なる嫡子に見あらはされし時 (地：455)

(16-D) Eine geheime Bestellung, die demalsten Don, nachdem er die Tochter nachdrücklich gewarnt hatte, durch die hämische Aufmerksamkeit seines stolzen Sohnes verraten worden war, (年老いたドンが、娘に強く警告した後、尊大な息子の悪意の配慮によって、彼に漏らされた秘密の伝言は、・・・)

(17-J) ふびんなるジョセフエは打出す鐘の [響や身にこたへけむ]、産の気づきて本堂の石段に僵れふしたり。(地：455)

(17-D) als die unglückliche Josephe bei dem Anklang der Glocken in Mutterwehen auf den Stufen der Kathedrale niedersank. (不幸なジョセフエは、鐘の音が鳴った際に、陣痛でカテドラルの階段にくずおれた)

(18-J) [わが着たる衣の鄙びたるをや笑ひたまふ] (悪：488)

(18-D) Wunderlicher Herr, was fällt Euch in meinem Anblick so auf? (へんな人、私の外見のどこがそんなに気になるのですか?)

(19-J) 物にや狂ひしと、(悪：508)

(19-D) Du ungeheurer Mensch! (おまえ、おそろしい人)

(20-J) いかにかグスタフ、聾にやなりし (悪：508)

(20-D) Gustav! in die Ohren und fragten ihn: ob er Nichts höre? (グスタフ！耳に入れろ。そし

て彼に、何も聞こえないのかと尋ねた。)

(16)は、[] に囲まれた部分は、ドイツ語内には存在せず、単に「強く警告した」とだけあるのだが、警告した理由を翻訳では付加している。そして、その部分をヤの係り結びで表している。(17)も同様に、ヤの係り結びで表している。

(18)は、当該例文の直前に「Sie suchte, indem sie sich mit ihrem Latz beschäftigte, die Verlegenheit, die sie ergriffen, zu verbergen, und rief lachend: (彼女は、自分の胸当てを触りながら、自分が感じている当惑を隠そうと試みて、笑いながら叫んだ)」とあるので、翻訳時に、「胸当て」という語ができたところから、〈鄙びた衣〉という訳を行ったのだろう。しかし、それでも、構造を変えている部分にヤの係り結びを用いていることになる。(19)(20)も同様、意識である。しかし、(20)に関しては、Iの「構造上分割した場合」の例とも解される。つまり、「ob er nichts höre?」という副文を「聾」という名詞に変えている。

以上のように見てくると、ヤを文中に使用して係り結びを用いている部分は、鷗外が翻訳時にその構造を変更したか、もしくは日本語では単純に表現できないところを、特別に取り上げているところだと言っていいたいだろう。そして、ヤの係り結び部分は、その当該構文の範囲を示しているマーカーのような役割を果たしていたと考えられる。

では、文末に付されているヤは、どのようになっているのだろうか。次節で、文末のヤを考察する。

3. 文末のヤについて

文末に付されているヤでは、以下のようにまとめられる。

- i. 単純にYes-No疑問文になっている場合
- ii. 意志を表す表現が入っている場合
- iii. 感嘆的な文

3.1 単純なYes-No疑問文

係助詞ヤが疑問を表す助詞であるのならば、文末

について疑問を表現すること自体は、普通の事であるが、大野(1993)で指摘されているように、疑問詞がヤの前に来る例はなかった。このことは、カと対比した際に意味の違いとなって現れる可能性があることを示唆していると思われる。

(21-J) 「ドン」フェルナンドなりとにやと (地: 467)

(21-D) Don Fernando Ormez?

(22-J) おん身は黒人にやと問ひぬ (悪: 477)

(22-D) und fragte: Seid Ihr eine Negerin?

(23-J) 彼は一人にや、(悪: 477)

(23-D) Ist er auch allein, Mutter?

(24-J) 今此童が家の主人をコンゴ、ホアングといふ黒人なりといひしは、信ならぬにやといふ。(悪: 478)

(24-D) Hat mir dieser Knabe nicht eben gesagt, daß ein Neger, Namens Hoango, darin befindlich sei?

(25-J) 一人の身の内なる齒と手と、各その形の同じからねばとて挑争ふに似たらずや。(悪: 480)

(25-D) Ist es nicht, als ob die Hände Eines Körpers, oder die Zähne Eines Mundes gegen einander wüthen wollten, weil das eine Glied nicht geschaffen ist, wie das andere?

(26-J) われらが年ごろ日ごろ貯へたる僅かの財産の、かのおそろしき土人の心を動かすべきを悟りたまはずや。(悪: 481)

(26-D) meint Ihr, daß das kleine Eigentum, das wir uns in mühseligen und jammervollen Jahren durch die Arbeit unserer Hände erworben haben, dies grimmige, aus der Hölle stammende Räubergesindel nicht reizt?

(27-J) 疲れに疲れたる我一行を、一夜二夜のほどなりとも、この屋根の下に休ませたまはずや (悪: 482)

(27-D) meinem Oheim und seiner Familie, die durch die Reise aufs Aeußerste angegriffen sind, auf einen oder zwei Tage in Eurem Hause Obdach zu geben, damit sie sich ein wenig

erholten?

(28-J) その人のおん身が心に協はざりしゆ糸ならずやと問ふ (悪 : 488)

(28-D) Gefiel er dir etwa nicht?

(29-J) われは客人の手紙を受取りしがいつこに置きしか忘れつ、汝は知らずや。(悪 : 497)

(29-D) und fragte Toni: wo sie den Brief, den ihr der Fremde gegeben, wohl hingelegt haben könne.

(22)(23)(24)(25)(26)(28)のドイツ語の例では、定動詞が倒置された一般的な疑問文である。(21)は、名詞句のみで構成され、疑問符が付された疑問である。(27)は、形式は平叙文であるが、最後に疑問符が付されて、疑問文となっている。このように見ると、ヤが文末に用いられている疑問文は、文全体が疑問文となっているもので、文中のヤから考えると、ヤで承ける範囲が文全体であることを表している可能性がある。ちなみに、(29-D)を逐次的に訳すと「どこに私 (sie) は、外国人が私 (sie) にわたした手紙を、いったい置いてしまったのだろうか」となり文全体が疑問となっている。しかし、文構造が変えられて「汝は知らずや」が補足されていることから、文中のヤで見た「IV原文にはない補足として」と同じ構造と解することもできるが、この場合、係り結びになつてはならず、その理由については再度考える必要があると思われる。

ところで、この例文の中には、ニヤという形式をもつものもあるが、これらに共通するのは、当該例文の前に、既にその語や文と同じ語や文が現れていて、その先行する語や文を受けて、オウム返しにその内容を問い返しているという例である。つまり、ニヤは単に疑問というよりは、前の台詞を受けて、オウム返しの問い返しなのだ。その意味で、藤田 (2011, 2012) で指摘している「②「～にや」で言い切られる文は、「～(ナ)ノカ」といった意で、問に用いられる」と合致することになるだろう。

3.2 意志を表す表現

ここには、ムヤという形式が翻訳中に見いだされ

る例が含まれている。(34)を除いて、すべて文末がムヤである。そして、(34)でもムは文内に内包されていて、ムの意志や未来を表現する事態を疑問にしている。ドイツ語には、wollen, werden, mögenなど意志や未来、願望を意味する助動詞が含まれている。

(30-J) この子はかしこの木下蔭に病み伏したる妻が子なるが、あはれ少しの乳を分ち玉ひなむやといふ。(地 : 461)

(30-D) ... fragte: ob sie diesem armen Wurme, dessen Mutter dort unter den Bäumen beschädigt liege, nicht auf kurze Zeit ihre Brust reichen wolle?

(31-J) 我子の父も欧羅巴人なることをおもへば、君が一行なる白人をあはれと思はざらむや。(悪 : 482)

(31-D) um des Europäers, meiner Tochter Vater willen, will ich Euch, seinen bedrängten Landsleuten, diese Gefälligkeit erweisen.

(32-J) 若し今の如くこの涼しき目を見ば、縦令膚は黒くとも、共に毒酒の杯をも飲まざらむや (悪 : 483)

(32-D) so hätte ich, auch wenn alles Übrige an dir schwarz gewesen wäre, aus einem vergifteten Becher mit dir trinken wollen.

(33-J) 父も性やさしき翁なれば、我命助けきといふ妻を心よく迎へざらむや。(悪 : 490)

(33-D) und einen alten ehrwürdigen Vater, der sie dankbar und liebeich daselbst, weil sie seinen Sohn gerettet, empfangen würde

(34-J) 直に近き開墾地の黒人を招寄せて、客を殺さむとすることもやと思へば心安からず(悪 : 493)

(34-D) Furcht, daß sie sogleich in die benachbarten Pflanzungen schicken und die Neger zur Ueberwältigung des Fremden herbeirufen möchte

3.3 感嘆的な文

ここでは、ドイツ語に感嘆符が付せられる例が多く観察された。そして、(35)(36)の2例には、ズヤという反語の形式が用いられている。意味的には、(38-J)

も反語的に捉えることができるだろう。つまり、大野（1993）に言及されている「アリエナイ」という感情を表現しているのである。

(35-J) かれ等を殺さずや、早や殺さずやと叫びぬ。

(地：468)

(35-D) steinigt sie! steinigt sie!

(36-J) そのててなし子にも地獄の供させせずやと叫びて、(地：471)

(36-D) schickt ihr den Bastard zur Hölle nach! rief er,

(37-J) 媼、なにフオオル、ドオファンを立ちたまひきとや (悪：479)

(37-D) Von Fort Dauphin! rief die Alte.

(38-J) 恩知らずの少女、あしきたくみにてひと時は意を得たりとも、天罰をのがれむや。(悪：506)

(38-D) die Rache Gottes würde sie, noch ehe sie ihrer Schandthat froh geworden, ereilen.

4. バヤとの対応

バヤは、(39)(40)(42)では、um～zuという目的を表す形式と対応しており、(41)では、「Hoffnug (希望)」という語の内容を説明するzu不定詞句と対応している。(43)は、当該箇所を逐次的に訳せば「少女が真心を持っているかどうかを試すための (zu prüfen) 手段があった」となり、目的を表すzu不定詞として解され、上記の3例と同じものとなる。

(39-J) 世を去りけむ人のために福を祈らばやと思ふほどに、(地：460)

(39-D) um seiner Seele, die sie entflohen glaubte, nachzubeten;

(40-J) かくおそろしかりし日の疲を休めばやと(地：460)

(40-D) um von einem so qualvollen Tage auszuruhen.

(41-J) 歎き請ひて [俱にここに居らばや] と。(地：464)

(41-D) daß er Hoffnung habe (wobei er ihr einen Kuß aufdrückte), [mit ihr in Chili zurückzubleiben].

(42-J) さればけふはわれ自ら命に掛けても [少しの食を得ばや] とおもひて来ぬ。(悪：480)

(42-D) dergestalt, daß ich mich selbst heute mit Gefahr meines Lebens habe aufmachen müssen, [um mein Glück zu versuchen]

(43-J) いかで此少女の心根探りみばやとおもひし客は (悪：487)

(43-D) da er gar richtig schloß, daß es nur Ein Mittel gab, zu prüfen, ob das Mädchen ein Herz habe oder nicht,

これらの例を見ると、ドイツ語では目的として表現されているものを、日本語では語順の関係上、意志に言い換えて訳しているわけだが、これも見方を変えれば、文中のヤの例で見た「I 構造上分割した場合」と同様の形式とも考えられる。つまり意志を表す文型は他にもあるわけであるが、ドイツ語の構文との対比から、あえてバヤという形式を翻訳に使用したとも考えられる。また、バヤは文をきちんと終わらせていない形式なので、文中のヤと同じとして扱うことも不可能ではないだろう。

5. 結論

文中のヤは、ドイツ語内では、副詞や否定辞を承ける句に用いられ、句節に内包されている部分や、内包している部分である同一文や同一節内の一部であったりした。そして、文末のヤは、文全体が単純に疑問文になっているものや、ムヤに対応する文にドイツ語では、wollen, werden, mögenなど意志や未来、願望を意味する助動詞が含まれていたりするもの、そして感嘆符付の感情が高ぶっている表現には、反語的なヤで訳されていた。

このようにヤの位置の違いによって、ドイツ語と対比させて鷗外の翻訳を観察してみると、結局、ドイツ語の文構造・句構造のまとまりが意識されて、それを表現するために係助詞という文中にも文末にも生起可能な助詞を使用していると考えられる。

つまり、ヤの生起が文中か文末かの差は、ドイツ語の句や節の構造を、翻訳した際、その範囲がどこまでなのかを表現するために、その生起する位置に

よって、示していたということが見て取れた。

今後の課題として、カというヤと同様に疑問を表現する係助詞の例も見ることが必要であり、スコープという観点でも再度、考察する必要があると考えられる。

また、藤田 (2011, 2012) で主張されているヤの位置の違いによる意味の差は、どのような理由によってもたらされるのかも今後の課題とする。

今回、鷗外の翻訳をドイツ語の原文と比べることで、鷗外のドイツ語の構造を意識した丁寧な翻訳の状況が明らかになった。このように、翻訳作品を原文のドイツ語と比べることの意義はあったと思われる。

注)

- 1) 藤田 (2011, 2012) では、「係助詞」という用語は使用されていないが、本稿では、文中と文末のどちらの用法で用いられても「係助詞」と統一することとする。
- 2) 『鷗外全集 第1巻』(岩波書店, 1971年)の「後記」によれば、「地震」は、原題を“Das Erdbeben in Chili”といい、明治23年3月17日から26日まで10回にわたって『国民新聞』に掲載されており、「悪因縁」は、原題が“Die Verlobung in St. Domingo”で、明治23年4月23日発行の雑誌『国民之友』第6巻第80号から7月23日発行の第7巻第89号まで9回にわたって連載されていた。
- 3) Heinrich von Kleist (1777-1811) [ハインリッヒ・フォン・クライスト] は、フランクフルト・アン・デア・オーダーに生まれ、プロイセンの軍人の経歴を持つ。作品にはロマン派的要素と指摘できるものもあるが、その近代的な個性ある作品の写実性はロマン派の枠を超えていると指摘されている。(藤本他1977)
- 4) ④まで言及されているが、④はゾについての説明なので、本稿では省略した。
- 5) 鷗外訳の日本語例文には、『鷗外全集 第1巻』(岩波書店, 1971年)のページを付しておく。「悪因縁」は「悪」、「地震」は「地」とし、コロンの後の数字が該当のページである。

6) 例文番号は、ドイツ語と日本語で呼応するものがある場合には、ドイツ語にDを付し、日本語にはJをつけて表す。そして、両者を同時に示す場合は、DやJのアルファベットの無い番号で指示することとする。また、ドイツ語もしくは日本語のみで、それに呼応する日本語もしくはドイツ語をあげないときも、アルファベットなしの番号のみを付す。

- 7) ドイツ語にしばしば、高橋が訳をつけているが、説明に用いるため、ドイツ語に対して逐次的に訳している。日本語の自然さには、考慮していない。また、種村氏の翻訳も参考にさせていただいた。
- 8) 例文に用いる表記は、日本語・ドイツ語ともに資料であげているのみに準拠することとする。
- 9) ここでの副詞の意味は、岩崎 (1998) によっている。

【資料】

森鷗外の翻訳

「地震」『鷗外全集』第1巻(岩波に書店, 1971年) pp.453-472.

「悪因縁」『鷗外全集』第1巻(岩波に書店, 1971年) pp. 473-511.

クライストの作品

“Das Erdbeben in Chili” In: *Sämmtliche Werke* (in 2 Bdn.). Bd. II Leipzig, Verlag von Philipp Reclam jun. 1883. pp.253-265.

“Die Verlobung in St. Domingo” In: Paul Heyse & Hermann kurz(ed.): *Deutscher Novellenschatz* (in 24Bdn.). Bd. I. München, Verlag von Rudolph Oldenbourg. 1871. pp.50-105.

Kleist, Heinrich von. *Sämmtliche Erzählungen und andere Prosa*. Stuttgart: Philipp Reclam jun., 1984.

翻訳

H・V・クライスト(種村季弘訳)『チリの地震：クライスト短篇集』(河出書房新社, 1996年)

【参考文献】

岩崎英二郎編 (1998) 『ドイツ語副詞辞典』白水社
大野晋 (1993) 『係り結びの研究』岩波書店

- 金水敏 (2012a) 「理由の疑問詞疑問とスコープ表示」
『近代語研究』第16集, pp.349-367.
- (2012b) 「疑問文のスコープと助詞「か」「の」」
『國語と國文學』89-11, pp.76-89.
- 桜井和市 (1986) 『改訂 ドイツ語広文典』(改訂50
版) 第三書房
- 藤田保幸 (2011) 「森鷗外訳「ふた夜」の疑問表現
について」『國文学論叢』56, pp.48-73.
- (2012) 「鷗外初期文語体作品の疑問表現
について:『水沫集』所収作品を資料として」『龍
谷大学国際センター研究年報』21, pp.17-31.
- 藤本淳雄他 (1977) 『ドイツ文学史』東京大学出版
会
- Durrell, Mratin (2011) *Hammer's German Grammar
and Usage*. London and New York: Routledge.
- (受稿 平成26年12月8日, 受理 平成26年12月15日)

